

郷土研通信



ハシドイ（ドスナラ）

アイヌ語：プシニ（はねる・木）
火にくべるとバトバチはねることから。この木の枯れたのは油が染みたようによく燃える。

発行：てしかが郷土研究会 (Teshikaga Regional Studies Association)
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10（松橋方）

文章責任：松橋 秀和

近況報告

川湯小学校と

松阪市小野江小学校、

リモートで交流

一月二日に松浦武四郎を縁に川湯小学校と松阪市小野江小学校の児童がリモートで交流があり、それぞれの地域や学校の特徴をクイズで出し合い、質問などを投げかけていました。

川湯小学校からは教室の窓から外の雪景色を写すと、小野江小学校の児童は驚きの歓声をあげていました。クイズのコンテンツは児童が作ったもので、完成度は高いもので感心しました。

図書館の郷土資料を

ふるさと歴史館へ

所管替えの要望

弟子屈町図書館で所蔵している郷土資料をふるさと歴史館の所管とする要望です。

これは、現在進められている「中心市街地再構築構想」の複合施設に図書館も含まれていますが、図書館

リモート交流から発展して相互訪問交流へと進むと良いのですが。

なお、川湯小学校は、コタンにあった屈斜路尋常小学校川湯特別教授場として開設されてから今年で百年です。お祝いの行事に当会も協力したいです。



の運営は行政（役場）職員ではなく、指定管理者となるようです。

地域の郷土資料の取り扱いは、その地域に永く在住し、地域の住民に信頼されて、地域の特性、所蔵資料の内容に熟知していなくては対応ができない、と考えられています。

ふるさと歴史館はその施

設の性格から、地域の歴史や文化、自然環境など問い合わせが近頃多く、現場の職員はその都度図書館へ出向き、関係史料を調べる、ということをしています。

その負担は多く、担当職員の調査研究、施設管理などに支障を来しているように見受けられます。併せて、担当職員から当会への紹介もあり、近くに史料がなければ教示することもままありません。

そこで、郷土資料をふるさと歴史館へ所管替えをして、地域住民等へ対応してはいかかでしょうか、との要望です。

公共図書館には、郷土資料の収集と提供という地域住民への奉仕という使命があります。他の地域で図書館の運営を指定管理者に委託しても、郷土資料・歴史資料の取り扱いを分けて行政職員が担当していると

ころがあります。近々に教育委員会へ提出します。

勉強会

更科源藏著

「原野シリーズ」に

弟子屈を読む

その1

『父母の原野』の段

講師 松橋秀和氏

原野の詩人 更科源藏の著作「原野シリーズ」には、明治初期から昭和の初めまでの弟子屈の庶民の生活が描かれています。

勉強会の内容を「むかしむかし写真館」で解説を加えて暫時紹介していく、とのこと。

次回の例会

令和八年二月二五日（水）

一九〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

更科源藏著

「原野シリーズ」に弟子屈を読む

その2

『おさない原野』の段

講師 松橋秀和氏

むかしむかし写真館

No. 362

更科源蔵著「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『父母の原野』の段―その1

松橋 秀和

はじめに

熊牛原野に生まれた「原野の詩人 更科源蔵」には、ふるさと熊牛原野、弟子屈、屈斜路での生活を綴った「自伝的小説」や随筆があります。そこには『弟子屈町史』などには記されない、農業移民やその他の移民、この地域に古くから住んでいたコタンの人びとの普段の生活が生き生きと描かれています。

筆者が「原野シリーズ」と称するのは、

『熊牛原野』

1965（昭和40）年

『北海道・草原の歴史から』

1975（昭和50）年

『北の原野の物語』

1978（昭和53）年

『雪原の道』

1980（昭和55）年

『原野』

1980（昭和55）年

『父母の原野』

1983（昭和58）年

『おさない原野』

1984（昭和59）年

『少年たちの原野』

1984（昭和59）年

『移住者の原野』

1986（昭和61）年

『青春の原野』

1987（昭和62）年

で、それ以外に『弟子屈町史』（更科源蔵編 1949（昭和24年）は当然として『明治人 土沼助吉傳』1969（昭和44年）にも弟子屈が描かれています。

更科源蔵が晩年に記した『父母の原野』『おさない原野』『少年たちの原野』『移住者の原野』『青春の原野』には、明治の草創期から昭和の初めころの弟子屈が物語の舞台となっています。明治の草創期から更科源蔵が物心のつくまでの出来事などは、記憶力の良かった母から教えられたよう

です。これらを題材に『弟子屈町

史』やその他の資料から昔の弟子屈の様子を探っていきます。そこには、弟子屈で今を生きる我々が未来の人たちに残していかなければならない何かがあるように思うのです。なお、物語は史実を基にしていますが、あくまでも小説で、登場する人物は仮名です。

『父母の原野』の段

物語は明治18年、四郎（物語の主人公）の父母が北海道で鉄道敷設の仕事をしていた父の兄を頼って新潟県から北海道へ入植するところからは始まります。

最初の入植地は札幌の寒寒で、父の兄（四郎の伯父）がアトサヌプリの硫黄鉱山の鉄道敷設が明治20年に始まり、赴いたのを機に父たちは明治21年に釧路へ移住することを決めます。移動は冬でした。荷物は馬籠に積み、道なき道を徒歩で進みます。空知太（現滝川）からは阿寒へ行くアイヌの夫婦が直別まで同行してくれる

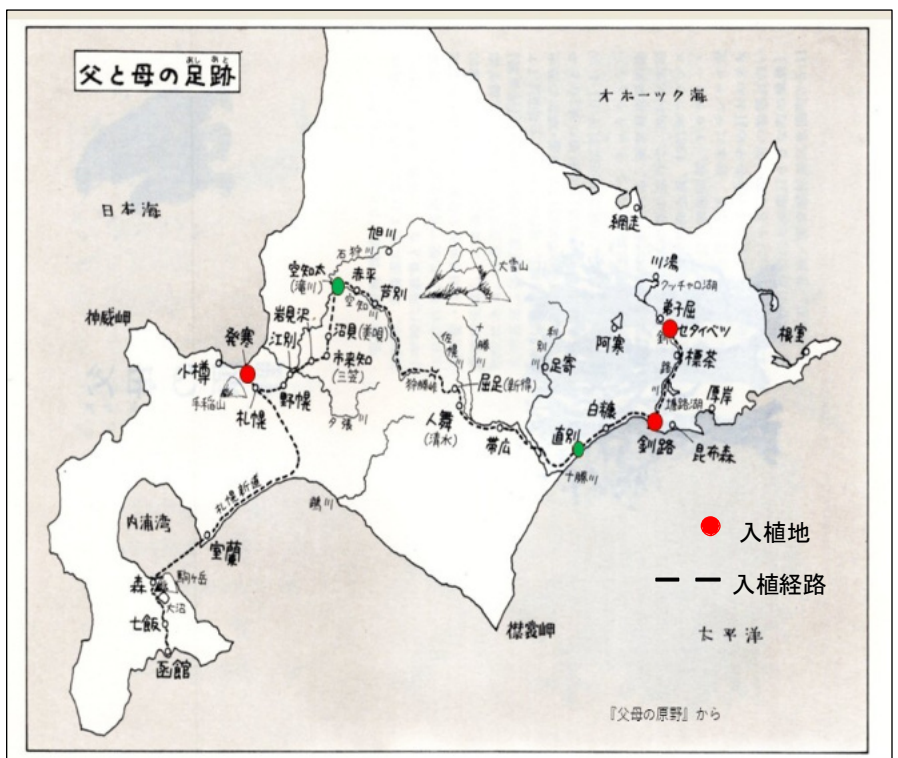


装丁画 佐藤忠良

ことになります。このアイヌの夫婦から厳しい冬の北海道で生き延びるすべを教えられました。このときの教えが後の開拓生活を支えることになります。父たちは、春採の丘で開墾を始めますが、釧路地方沿岸の春から夏に海務が押し寄せた気候は、本州から移住してきた農民には農耕に適さない土地でした。

それでも我慢して開墾を続けているある日、父は釧路川上流は土地が肥えていて、野菜などの作物は硫黄鉱山で買い取ってくれるとの話を聞き、熊牛原野のセタイベツに三度目の移動を決意します。それが明治23年で、テシカガで初めて農業移住者でした。

（つづく）



『父母の原野』から